

私、長瀬がマークさんと最初にお会いしたのは 2014 年でした。最後にお会いしたのは、2022 年 10 月 6 日でした。さきほどお父様がおっしゃっていた撮影の際でした。マークさん、マークさんから私宛の最後のメッセージを紹介することをお許しください。

「長瀬先生、大変、ありがとうございます。ドキュメンタリーのインタビューのためにお台場までご足労いただき、感謝申し上げます。「先生はこれまでずっと私に多くのインスピレーションを下さっています。先生は長年にわたって、私をたくさん助けてくださいました。本当に、本当に感謝しています。そして、父も同じ気持ちです。先生を、これからもお手本にして、いっそうアクセシブルでインクルーシブな社会を日本そして世界で実現するために活動を続けたいと思います。私は「マークさんこそが私のインスピレーションであり続けています。♥️」と応えました。

ポールさんの心のこもったメッセージを受けて、私からもマークさんのもう一つの大きなレガシーをご紹介します。それは、彼が生前に出版を準備していた著書のことです。今年 9 月にオックスフォード大学出版局から刊行予定の Disability Publics: Making Accessibility in Modern Japan (『障害の公共圏：近代日本におけるアクセシビリティの形成』) は、マークさんが日本社会の歴史と制度に深く切り込んだ研究の集大成です。

この書籍では、インクルージョン政策が誰によって、どのような過程で形成されてきたのか、そしてどのような視点が見落とされてきたのかを問い直しています。障害の公共性をめぐる政治を丁寧に読み解きながら、より公正な社会の未来を展望する内容となっています。

目次は以下のとおりです：

序論：日本の障害学はすべての人々のためのもの

第 I 部 障害の定義

第 1 章：戦前期（1868-1937）における身体的特権

第 2 章：戦時福祉と戦後政策の形成（1937-1957）

第 II 部 拡大と排除

第 3 章：経済成長と居住施設の発展（1957-1970）

第 4 章：施設解体と統合実験（1970-1981）

第 III 部 地域生活

第 5 章：自立生活とユニバーサルデザイン（1981-2006）

第 6 章：実施上の課題と差別禁止法（2006-2014）

第 7 章：パラリンピックの可能性とインクルージョン・プロジェクト（2014-2021）

結論／エピローグ：障壁の打破——分析から実践へ

刊行が本当に待ち遠しい一冊です。日本の障害学に関心をもつ英語圏の研究者にとって、間違いなく必読の文献となるでしょう。マークさんが国際委員を務めていた障害学会の『障害学研究』誌や、英語のジャーナル International Journal on Disability and Social Justice などでもぜひ紹介したいと考えています。

さて、ポールさんのご発言の中で触れられていた重要な点に移りたいと思います。それは、本来であればこの上映会と、他 3 回のイベントに対して、アメリカ政府から助成金が支給される予定だったという事実です。ところが、「DEI を推進する内容である」との理由で、現政権により突然中止されてしまいました。

当初、この助成金によってポールさんを再び日本にお招きし、本日の上映会にもご登壇いただく計画でした。助成決定の通知が出たのは昨年 9 月で、受け皿となったのは、お父様を理事長とする米国の NPO 法人「マーク・ブックマン財団」です。名前こそ立派ですが、実際の活動は完全に手弁当で運営されています。私もその理事の一人です。だからこそ、助成決定の通知を受け取ったときには、大きな希望が湧き上がりました。私たちは以下の 4 会場での上映と討論の準備を進めていました、東京大学先端科学技術研究センター（先週土曜日）、東京の江戸川の自立生活センター（月曜日）、別府の立命館アジア太平洋大学（水曜日）、そして今日です。

しかし、忘れもしない 2 月 26 日、米国国務省から突然、「この事業は当局の優先事項ではなくなった」「受給者はただちにすべての事業を停止せよ」との通知が届いたのです。すでに決定していた助成金を、一方的に、しかも突然取り消すという、きわめて異例かつ不誠実な対応でした。

DEI に対する現在の政権の攻撃は、1990 年に成立した ADA（アメリカ障害者法）を象徴とする、米国の先進的な障害者差別禁止政策（そこには合理的配慮の否定も含まれます）に深刻な影を落としつつあります。ADA は父ブッシュ政権下で成立し、日本や国際社会にも大きな影響を与えました。私も執筆に関わった『ADA の衝撃』という書籍も刊行されました。

ADA に代表される米国の取り組みは、2006 年の障害者権利条約、そして 2013 年の日本における障害者差別解消法の成立にも寄与しました。この法制度を基礎として、日本では部落差別解消法、ヘイトスピーチ解消法、LGBT 理解増進法などが相次いで制定され、それ以前に成立していた男女共同参画社会基本法とともに、インクルーシブな社会を目指すための土台が築かれてきたのです。

しかし、今やその ADA すら、後退の危機に瀕しています。今年 6 月上旬、国連本部で開催される障害者権利条約締約国会議では、市民社会フォーラムのトピックの一つとして「多様性に反対する政治的言説」が取り上げられます。日本からも、優生保護法の被害者が初めて参加を予定しています。これはアメリカだけの問題でも、日本だけの問題でもありません。世界全体が、DEI をめぐって大きな岐路に立たされているのです。

そして本日、このイベントを共催し、運営の実務を担ってくださっている生存学研究所のような取り組みこそ、まさに現在の攻撃の対象となっているのです。

だからこそ、私たちはマークさんの声に耳を傾け続けなければなりません。マークさんは、きっとこう言ったでしょう。「たとえアメリカが後退しても、日本が前に進めるなら、世界には希望がある」と。そしてその希望は、ここに集う一人ひとりの中に、確かに芽生えていると私はそう信じています。

最後になりますが、私がこの様々な要素がてんこ盛りの映画を通じてマークさんから受け取ったメッセージを共有させていただきます。それは、マークがこのドキュメンタリーで伝えようとしているメッセージは、「自分が多くを成し遂げられた理由は、父親であるポールをはじめとする、可能性を信じる共同体（コミュニティ）のおかげであり、そうした共同体の支えがあれば、誰もがより多くを成し遂げられる」という強い思いです。そして、マークさんは、そうした支えの提供を自ら実践されていました。その思いを私たちが受け継ぐことが、マークさんのレガシーを活かすもう一つの道筋ではないでしょうか。

足を運んでくださった皆様、今日の開催を実現してくださった生存学研究所の皆様に、心より御礼申し上げます。私からは以上です。ありがとうございます。